



小池辰雄記念図書室だより

2016. 8. 10(水) NO.32

千葉市若葉区都賀 3-24-8-4F 小池辰雄記念図書室発行

「無者キリストを読み終わって」
伊藤泰輔（余市）

「本書は万人むきに書いたつもりである」
(P3 総序)、と小池辰雄先生はお書きになっています。仏教用語もあり、東洋の香りが漂う文章は、とてもエネルギーでリズム感もよく、読んでいて楽しく感じました。小池先生が多くの人々に主イエスキリストを紹介したい熱意がよく伝わってきました。

私が余市恵泉塾に来させていただいてから2年、つまり札幌キリスト召団の福音を学び始めてちょうど2年経って、『無者キリスト』を読み始めたことになります。そのためか、内容に違和感はありませんでした。また、水谷師の先生が小池辰雄先生だということも読み始めてすぐ納得しました。教育界、日本のキリスト教界の改革を強く訴えていらっしゃるからです。とても共感できる内容でした。

私が生活、仕事における実践現場で、愛せない者から愛する者への造り替えが必要である、とひしひしと感じ、苦しんでいる時でした。ちょうどその頃、キリストが無者であり、その具体的言動についてわかりやすく書かれている本書に出会えたことは、タイムリーな助けとなりました。

余市恵泉塾での生活は、小池先生の言葉をお借りすれば、聖霊の世界への「突破、突入」を目指すのでなければ意味を成さず、また、まさに恵泉塾こそが、「突破、突入」の実践現場であると実感しています。この本は、私が余市で信仰生活を送る上で必要不可欠な本であるからこそ、主なる神が与えてくださったのだと思います。

今年5月、ニュースレター「波止場便り」第270号が発行されました。水谷先生が小池先生と取り交わされた書簡のことが記されていました。そこには「聖秘」とされた内容が公開され

ています。小池先生は水谷先生のことを「貴君は、ある意味で私の魂の世界の後継ぎである」として喜びを表されました。そのお気持ちを汲んで、魂の世界の後継ぎでいらっしゃる水谷先生は、本書をわかりやすく解説してください、その解説の中で、小池先生についてたくさんお語りくださいました。ここに私たちには強い師弟愛を感じます。

水谷先生は、ニュースレターの中で「私は小池神学を逸脱したのではない。愛の実践を通して先生の到達点を一面乗り越えたのだ。先生は、そのことを誰よりも喜んでおられると思う」とお語りになりました。『無者キリスト』を読み終えて、小池辰雄先生が今もどこかに生きていらっしゃるような、そんな気がしています。

小池辰雄を読む会

●余 市「無の神学」

2016年9月4日（日）13:30～15:00

余市郡余市町豊丘町370-9 恵泉祈りの家

*会費:無料(自由献金)

*連絡先:0135-23-9222(木下)

●札 幌 「無者キリスト」

2016年10月1日（土）13:30～15:00

札幌市南区川沿10条3-10-5 札幌祈りの家

*会費:無料(自由献金)

*連絡先:011-571-2348(浅井)

●都 賀 「聖書の人ルター」

2016年8月20日（土）10:00～12:00

2016年9月17日（土）10:00～12:00

千葉市若葉区都賀3-24-8 都賀プラザ5階

*会費:1000円

*連絡先:043-235-3815(石丸)

*準備のため、出席のご連絡をお願いします。

*予習不要・初心者歓迎

本図書室は献金で運営されています
図書室便りは隔月発行です

知りたくなかった真実

今年 73 歳になる弟から電話があつて、
「親父がヒトラー礼賛者だったなんてことはない
よな」と唐突に訊いてきた。弟の娘が、『おじい
ちゃんがヒトラー礼賛者だったってネットに書い
てあるけど本当?』と聞いたのだそうだ。

ネットのどこにそんなことが書いてあるのかわ
からないが、「ヒトラーは悪魔」という今の常識か
ら考えると、弟の娘のショックも仕方がないだろ
うが、「何だ知らなかったのか」と答えると弟も「え
ー!?!」と驚いているのには、逆に驚いた。

弟を除いて私も姉たちも、父・辰雄が「ヒトラー
は天才だ」と話すのを何度も聞いている。弟だけ
は終戦の年 2 歳だから知らなくて当然だが、この
こと自体は特別驚くほどのことではない。戦後
70 年もたつと、当時の日本人の一人残らずが「ヒ
トラー礼賛者」だったことなど誰も覚えていない
だけのことだ。

ただ辰雄がそうした一般的な日本人より多少熱
心にヒトラーを賛えたのは、辰雄がドイツ文学者
であったからヒトラー礼賛以前に熱烈なドイツ礼
賛者だったし、当時辰雄と同世代のドイツ文学者
は、例外なくナチス・ドイツ礼賛者だったと思う。
私は 5 歳の時、父がスクラップ・ブックに貼った
ヒトラー・ユーゲント（ヒトラー青少年団）の写
真を見せ、「ドイツの少年たちはすばらしい」とほ
めたのをよく覚えている。午前の日差しがまぶし
い四疊半の書斎につながる窓辺でのシーンを今で
も鮮やかに思い出せるのは、その写真に写っていた
ドイツの少年たちの服装、真っ白なセーターと
ストッキング、それにがっちりした編み上げ革靴
をうらやましく、ほしいと思ったからである。日本
の週刊誌などまったく関心を持たなかった辰雄
だが、ドイツの写真雑誌は特別に取り寄せていた
ので、宣伝上手のヒトラーにコロッと騙されてしま
ったのだろう。

戦争が終わってしばらくのあいだ、わが家は全
員が四疊半に寝ていた。夜中にうなされた父がド
イツ語で怒鳴っているのを何度も聞いたことがある。
あの時辰雄は夢の中でドイツ人相手に「ヒトラー
の失敗は、ナポレオンの歴史に学ばずソ連侵
攻をしたことだ」などと議論をしていたのかも知
れない。まさかヒトラーが六百万人のユダヤ人を
虐殺したことなど知る由もなかつたのである。

ドイツ大好き人間の父が搖らぐようになったの
は、私の姉が夢中になって読んだベストセラー『光

ほのかに・アンネの日記』（文藝春秋社）を家庭で
話題にした昭和 27 年頃からだったろう。ナチス
のユダヤ人強制収容所の惨劇を私も知つたのである。

昭和 27 年という年は、熊本阿蘇山での霊的体験
から 2 年目、「武蔵野幕屋」を立ち上げ、『曠野の
愛』誌を刊行しはじめたばかりで、もはやヒトラー
もドイツも辰雄の関心のはるか外になっていた。
しかしそれから数年後のある夜、高校 1 年生にな
っていた私をわざわざ書斎に呼んで、『読んでごら
ん』とだけいって渡されたのが『夜と霧—ドイツ
強制収容所の体験記録』（みすず書房）であった。
ヒトラーが悪魔であったことを知った辰雄の衝撃
は、かわいそうなくらいだったと思う。本を渡し
ながらただ首をふるだけだった。

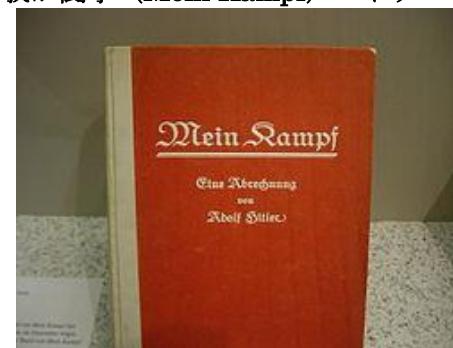
その翌年、『三光—日本人の中国における戦争犯
罪の告白』（カッパ・ブックス）という本が出てベ
ストセラーになった。こうしたベストセラーものを
嫌っていた辰雄は、珍しくこの本を買ってきていた。
日本軍が中国大陸でおこなった殺戮の写真を載せ
たものだったが、辰雄はこれを茶の間に放り投げ
たままこの本については一言も語らなかった。

小池辰雄が「ヒトラーの礼賛者」だったと言つ
ても家庭内の出来事だし、社会的にそういう発言
をしたわけでもないのだから、「たいしたことじや
ないよ」と弟には話したが、本当に本人にと
って大したことじやなかつたとは思えない。

私の印象からいえば、この戦後の一連の出来事
の中で、この世の人間の所業一切を（自分をも含
めて）「愚かなことだ」と深く心に刻み、この世=
此岸ではない「彼岸」に生きたいと願つたよう
に思う。

前号に書かれた辰雄の号「天鐘」の前には、「彼
岸」という号を使っていたのもそういう思いから
だろうし、やがて日本の高僧へ近づいていくのも、
こうした契機があつたからだと思う。

我が闘争（Mein Kampf）ヒトラー著



1925 年発行初版（ドイツ歴史博物館蔵）